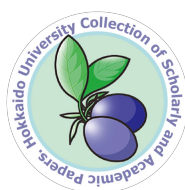




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アイヌ語における「完了」表現があらわす証拠性
Author(s)	吉川, 佳見
Citation	北方言語研究, 10, 203-218
Issue Date	2020-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/93117
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77597
Type	departmental bulletin paper
File Information	12_203_218.pdf



アイヌ語における「完了」表現があらわす証拠性¹

吉川 佳見

(国立国語研究所／千葉大学人文社会科学研究所博士課程)

キーワード：アイヌ語、アスペクト、完了、証拠性、エヴィデンシャリティ

1. はじめに

アイヌ語は文法的テンスを持たず、アスペクト形式の使用も義務的ではない。その中で助動詞 *a* (以下 *a*) は、過去・完了(perfect)の標識として説明されてきた。これについて筆者は吉川(2015)で、過去・完了を表さない場合にも *a* が使われることを指摘していたが、それが *a* のどのような機能によるものなのかは検討すべき課題となっていた。本稿ではまず、*a* が従来説明されてきた perfect ではなく、perfective を示す性質があることを主張したうえで、アスペクチュアルな意味から離れた例外的な用例を証拠性(evidentiality)の観点から捉え、*a* は直接証拠性を標示しうる形式であると提案する。また同時に、吉川(2018)を挙げ、助動詞 *aan* (以下 *aan*) が間接証拠性を標示しうることを述べたうえで、*a* および *aan* の機能の定義を試みる。

扱うアイヌ語の資料は、沙流方言、千歳方言のものとするが、先行研究はこれに限らない。用例の下線、傍点は筆者による。一部、日本語・アイヌ語表記を現在一般的に使用される表記に改変したところがある。和訳は原典のものを引用した。なお、*a*、*aan* はそれぞれ *rok*、*rokoka* の形をとることがある²が、本稿では *a*、*aan* の形で代表させる。

2. 先行研究³

a については、金田一(1993 [1931])、知里(1974 [1936], 1973[1942])、田村(1960, 1988a)⁴、佐藤(2006, 2007, 2008)がその機能について記述している。

金田一(1993 [1931])は、「*a* は「完了態 (perfective) ⁵」を表す。『ちゃんと…した』意、即ち完了の様な意味を表わす。而もその結果の今まで及んでいるような心持を持っていることがある。(p.293)」と記している。知里(1974[1936])は、*a* が「動作の完了又は過去を示していることが多い (p.157)」とし、*a* を「確説法 (文の内容を既定の事実として確説するもの) (p.157)」をあらわすムードの形式とみている⁶。田村(1988a)では、「*a* は、今、問題にされているときよりも以前に起こったことを表わす「～した」を表す。現在からみて過去ので

¹ 本稿は、吉川(2015,2018)および日本北方言語学会第2回大会(於富山大学)における口頭発表に、加筆・修正を加えたものである。当大会においては、参加者の方々から大変貴重なご指摘やご質問をいただきました。また、本論文査読者の方々からも大変重要なご指摘をいただきました。感謝の意を表します。

² 助動詞の *a* は自動詞 *a*「座る」を語源とする。自動詞 *a* は複数形の場合 *rok* となり、助動詞の *a* も複数形では *rok* となる。*aan* は動詞 *a*+存在動詞 *an*「ある、いる、なる」という構成であり、複数形では *rokoka* (*rok* に、*an* の複数形 *oka* が後続する) 形をとる。

³ 先行研究内の用例グロスには本稿筆者によるものである。

⁴ 田村(1960)は、本稿末尾参考文献一覧の田村(福田)すず子(1960)を指す。

⁵ 態の訳語としては *aktionsart*, *aspect* を用いている。

⁶ 知里(1973 [1942])にも、*a* が「態を表すというよりは寧ろ法を表している」と見られる(p.503)」とある。

きごとであるだけでなく、それ以後のできごとにも問題にされているときに、この助動詞は用いられる。(p.41)」と説明されている。例えば(1)の場合、食べるという動作が過去のものであるというだけではなく、「食べてしまったから包丁はいらない」という気持ちも表されていることになる。

- (1) ku=mimaki ani kapu ku=kar wa k=e a_wa.
1SG.A=歯 で 皮 1SG.A=～をむく て 1SG.A=～を食べる A FIN

私の歯で皮をむいて食べたよ

(りんごの皮をむくために包丁を持って行って渡そうとしたら、こう言った。

もう食べてしまったから包丁はいらない、という気持ち)

(田村 1988a : 41 一部表記変更)

また、田村(1960)では、a が発話時以前と発話時現在との「比較」をあらわす要素であることにも言及されている。例えば(2)では、雨が降ったときと、涼しくならなかったときが「比較」の関係にあるという。

- (2) apto as a_korka sirmeman ka somo ki.

雨 降る A けれど 涼しい も NEG する

雨が降ったけれど涼しくならなかった

(田村 1960 : 347)

そして参考として(3)を挙げ、この場合は「比較する時がないので、昨日のことでも a を用いない (p.347)」と説明している。

- (3) numan apto as.

昨日 雨 降る

「昨日雨が降った」

(田村 1960 : 347)

佐藤(2008)⁷ は、「a は「～た」と訳することができるが、単純な過去の意味だけを表すのではなく、ある行為が既に行われたかまだ行われていないのかを現在時点との密接な関係付けにおいて述べる「完了」の機能を持っている。(pp.78-79)」と説明している。例えば(4)については、「その記憶が今も生生しく残っている」というようなニュアンスで語られているようである。(p.187)」と述べている。また、現在に与えている影響は「漠然とした、間接的なもの (p.188)」であるという。

⁷ 佐藤(2006, 2007, 2008)において a の機能に関する記述を行なっているが、以下では各記述の総括に相当すると考えられる佐藤(2008)を参照した。

- (4) k=onaha k=unuhu ku=kasuy wa poronno ku=nepki a wa.
 1SG.A=父 1SG.A=母 1SG.A=～を手伝う て たくさん 1SG.S=働く A FIN
 「私の父母を私は手伝ってたくさん働いたよ。」

(佐藤 2008 : 183 一部表記変更)

3. 問題提起

以上、2章で見たように、金田一(1993 [1931])、田村(1960, 1988a)、佐藤(2008)は、aが問題となる事態が発話時以前に生起したことを指す「過去」の標識であるとし、同時に、現在との何らかの関わりを示す「完了」の標識であると指摘している。この「完了」とは perfect、すなわち「現在に関係のある過去の場面、つまり過去の出来事の結果が現在にのこっていることをいいあらわす (コムリー 1988[1976] : 25)」ものだといえる。また、知里(1974[1936], 1973[1942])は a をムードの形式とみなしたうえで、それが動作の完了または過去をあらわすことが多いと述べている。以下、3章では、「完了」の定義について (3.1)、過去でも完了でもない場合に使われる a について (3.2) の二部に分けて、問題提起を行う。

3.1 「完了」の定義について

アイヌ語は無テンス言語であるため、そもそも無標の動詞でも過去の事態を表すことができる。たとえば (1)では動詞 e「～を食べる」に a が後続して「食べた」と解釈されているが、a がなかったとしても、状況判断で過去として解釈することは可能である。(4)も同様に、a がなくても、動詞 nepki「働く」を「働いた」というふうに過去の事態として解釈することができる。

- (1 再掲) ku=mimaki ani kapu ku=kar wa k=e a wa.
 1SG.A=歯 で 皮 1SG.A=～をむく て 1SG.A=～を食べる A FIN
 私の歯で皮をむいて食べたよ

(りんごの皮をむくために包丁を持って行って渡そうとしたら、こう言った。
 もう食べてしまったから包丁はいらない、という気持ち)

(田村 1988a : 41)

- (4 再掲) k=onaha k=unuhu ku=kasuy wa poronno ku=nepki a wa.
 1SG.A=父 1SG.A=母 1SG.A=～を手伝う て たくさん 1SG.S=働く A FIN
 父母を私は手伝ってたくさん働いたよ

(佐藤 2008 : 183 一部表記変更)

a が「完了」として解釈されてきたのは、それが単に過去のことを言い表すのではなく、過去の場面が(1)の「もう食べてしまったから包丁はいらない、という気持ち(田村 1988a:41)」や、(4)の「その記憶が今も生々しく残っている (佐藤 2008 : 187)」といった形で現在にまで引き続いていると考えられてきたからである。ここで言う「完了」とは、先ほども述べたが、「過去の出来事の結果が現在にのこっていることをいいあらわす (コムリー 1988[1976] :

25)」、perfect を指す。

確かにそうしたニュアンスが a のアスペクト的機能に起因する可能性は排除しきれない。しかし佐藤(2008)が、用例によっては「現在との関係が不明瞭であり、なお一考を要する (p.188)」としているのも事実であり、検討の余地が残されている。

また、a は、(1)や(4)のように終助詞 wa を伴って文末相当の位置にあらわれるほか、(2)のように逆接の接続助詞を伴う場合が多くある。

(2 再掲) apto as a korka sirmeman ka somo ki.

雨 降る A けれど 涼しい も NEG する

雨が降ったけれど涼しくならなかった

(田村 1960 : 347)

このとき、a が perfect であるならば、雨が降ったという事態が現在において何らかの痕跡や効力を残していることになるが、だとすれば逆接の接続助詞とは本来共起しにくくなるのではないだろうか。たとえば現在完了について言えば、溝越(2016)は現在完了を「「現在の状況に照らして真である」ということを表す文法形式である (p.41)」と述べている。また、「現在完了とは、話者の発話態度として、「現状を見なさい、そうすれば私が言っていることの正しさが分かるはずです」という表現形式である (p.41)」とも述べている。しかし、a の場合は(5)のように、現在の事態とは逆に相当するような過去の事態を表すことが多くあり、現在の状況からみて真であることを積極的に表す形式とは言えない。

(5) esir pak anakne upas ka isam a p

さっきまで は 雪 も ない A だが

tane upas as kor an wa.

今 雪 降る て いる.SG FIN

さっきまでは雪もなかったのに、今雪が降っているよ。

(佐藤 2008 : 184)

現在とは断絶した過去を表す形式には、日本語の東北諸方言の「～タッタ」(完成相過去)や、韓国語の-essess-ta がある。これらは「基本的類似点として①現在との断絶性、②体験・目撃性を持つ (高田 2008 : 34)」形式であるが、相違点もある。高田(2008)によれば、-essess-ta は、過去のある時点で先立つ出来事を表す「過去パーフェクト」の用法を持つが、「～タッタ」には無い。工藤(2014)は、「～タッタ」は「＜完成・過去＞を表すのみであり、＜パーフェクト・現在＞は表さないため「モー食ベタッタ」とは言えない (pp.646-647)」と述べている。

a の場合、管見の限り、過去パーフェクトを積極的に示すとは考えにくく、この点で-essess-ta とは異なっている。また、「～タッタ」と比較すると、a は(6)のように「もう食べた」のような表現が可能であるのだが、副詞 tane は必ずしも日本語の「もう」に相当する語彙で

はない。tane は文脈によって、「今」「今や」「今すぐ」「もう」などと訳されるのだが、佐藤 (2008 : 185)は、tane は「今現在」を軸としつつも、「今より少し前」「今より少し後」を含めた比較的広い「今」を意味すると指摘し、「あまり tane を「もう」と同一視し過ぎないほうが良い (p.185)」⁸としている。(6)の場合も、過去の一時点を指していると解釈することもできる。

- (6) tane ku=ipe a wa.
 今 ISG.S=食事する A FIN
 今 (さっき) 私は食事をしたよ

(佐藤 2008 : 185)

このような点で、a は perfect ではなく perfective⁹、すなわち「内的な時間構成とは無関係に、ひとまとまりのものとしてとらえられる場面をさしめす (コムリー1988 [1976] : 25)」ものと見ることができる。また、a の回想的なニュアンスは perfect の機能によるものと考えられていたが、以下のように過去の場面を思い出す際に完成相である「～タッタ」¹⁰が用いられることを考えると、perfective からでも説明が可能である。

- ・[太郎の動作を目撃したのを思い出して]
 太郎 キノナ コノ席サ 座タッタ。
 (太郎は昨日この席に座った)
- ・[赤い壁を見たことを思い出して]
 壁ノ ペンキ アゲガタッタ。
 (壁のペンキは赤かった)
- ・[子どもの名札を見て確認したことを思い出して]
 アノ ワラス トナリマズノ 小学生ダッタ。
 (あの子は隣の小学生だった)

⁸ tane について、佐藤(2008 : 185)は、??esir tane ku=ipe a wa「さっきもう食べた」や、??nisatta tane ku=hosipi kusu ne wa「明日もう帰る」のような表現は恐らく不可能であるとしている。

⁹ 先行研究の記述には、perfective と perfect が混在している部分がある。金田一(1993 [1931])は、「完了態 (perfective)」の項目名のもと、a について『『ちゃんと...した』意、即ち完了の様な意味を表わす。而もその結果の今まで及んでいるような心持を持っていることがある (p.293)』と記しているのだが、項目名で perfective としている一方で、「結果の今まで及んでいるような心持」という perfect の性質を a に認めている。実際のところ、perfective と perfect は研究者によって定義や訳語の扱いがまちまちであり、ここでも金田一(1993 [1931])は perfect の意味で“perfective”という用語を用いていた可能性もある。しかし、a についての項目を見てみると、a の例文に加え下記のような aan(rokoka)の例文も含まれており、perfect を表すのが a の機能なのかどうか断定できない。つまり、a が『『ちゃんと...した』意 (p.293)』を表すにしても、「その結果の今まで及んでいるような心持を持っていることがある (p.293)」のは aan であるという可能性も否定できないのである。aan の用法については後述する。

Siramkutturi ciki ayke Oyna kamuy kene inunpe kar rok oka.
 よく考えて見る すると オイナ神 . はんの木 炉縁 ～を作る ROK OKA

よくよく考えて見たるにオイナ神がはんの木の炉ぶちを作ったのであった。(金田一 1993 [1931] : 293)

¹⁰ 「～タッタ」のほか、東北方言の文末形式「ケ」も回想のニュアンスを持つが、「ケ」が過去テンスとしてはたらくかどうかは方言によって異なる。(小林 2000 参照)

3.2 過去でも完了でもない場合に使われる a について

3.1 では a を perfective であるとしたが、これだけでは a の機能を説明しきれない。先行研究では触れられていないが、過去の事態でもなければ perfective でも perfect でもない a の用例がある。例えば(7)は物語の主人公が自身の素性について語る場面であり、(8)は川の性質について語っている場面である。(7)については、主人公(私)が「湧別川の中流の者」であることは時間の影響をうけない性質であり、ここで a が用いられる理由が何であるのかという疑問が生じる。(8)についても同様で、石狩川が増水すると沼のような大きな川になるというのはその川のもつ性質であり、a が使用されている理由の説明がつかない。

- (7) Yupet emko un aynu a=ne a p sitturaynu=an hine
 湧別川 中程 の 人間 4.A=COP A だが 道に迷う=4.S て
 oro ta ek=an ruwe ka a=erampewtek ruwe ne wa
 そこに 来る.SG=4.S こと も 4.A=～がわからない こと COP て
 mak a=ye uske ne ruwe ne ya a=kopisi akusu,
 どう 4.A=～を言う ところ COP こと COP か 4.A=～に尋ねる すると
私は湧別川の中流の者だけれども、道に迷って、
どこにきたのかかわからないので、何という場所なのかと、たずねますと
 (ア音 6 : 30)

- (8) a=kor Iskar anak pon uske ta anak nay pakno an oraun,
 4.A=～を持つ 石狩川 は 小さい とき に は 沢 ほど ある.SG そして
poro kor anakne to neno kane an poro pet ne p ne a p.
 大きくなる と は 沼 のような 大きい 川 COP もの COP A だが
 pet sat hine nay neno kane an rapok ne hike
 川 乾くて 沢 のような ～のとき COP だが
 petkasu=an hine okusne wa yan=an ruwe ne.
 川を渡る=4.S て 向こう側 から 上がる=4.S こと COP
 石狩川は水が少ない時は沢ぐらいで、
水が多くなると沼のような大きな川になるのですが、
 その時は川が水がなくなって沢のようになっている時でしたが、
 私は川を歩いて渡って、向こう岸へ上がったのでした。
 (ア音 5 : 77)

本稿筆者は、吉川(2015)において上記の例(7)(8)を挙げ、a が人や物の恒常的性質を述べる際にも使われることを指摘してはいたものの、それが a のどのような機能と結びつくのかは検討すべき課題となっていた。

以下、4 章では、例外的にみえる使用も含めて証拠性(evidentiality)の観点から捉え、a は直

接証拠性を標示しうる形式であると提案する。また同時に、吉川(2018)を参照しつつ、助動詞 *aan* (以下 *aan*) が間接証拠性を標示しうることを述べたうえで、*a* および *aan* の機能を定義する。

4. *a* と証拠性

4.1 *a* の「例外的」使用について

a には、テンス的意味 (=past) からアスペクト的意味 (=perfective) から解放された用法がある。先に挙げた(7)(8)は、いずれも時間の影響を受けることのない恒常的性質であり、*a* がなかったとしても同じような文意をあらわすことが可能だと思われる。しかし、無標の場合と違いがあるとすれば、*a* を伴った場合には直後の文と何らかの対比関係があるという点である。(7)は湧別の中流に住む者にもかかわらず、全く別の場所にいるという場所の対比性がある。(8)は水が増えた場合と水がなくなった場合との対比である。

(7 再掲)

Yupet emko un aynu a=ne a p sitturaynu=an hine
 湧別川 中程 の 人間 4.A=COP *A* だが 道に迷う=4.S て
 oro ta ek=an ruwe ka a=erampewtek ruwe ne wa
 そこに 来る.SG=4.S こと も 4.A=～がわからない こと COP て
 mak a=ye uske ne ruwe ne ya a=kopisi akusu,
 どう 4.A=～を言う ところ COP こと COP か 4.A=～に尋ねる すると
私は湧別川の中流の者だけれども、道に迷って、
 どこに來たのかかわからないので、何という場所なのかと、たずねますと

(ア音 6 : 30)

(8 再掲)

a=kor Iskar anak pon uske ta anak nay pakno an oraun,
 4.A=～を持つ 石狩川 は 小さい とき に は 沢 ほど ある.SG そして
poro kor anakne to neno kane an poro pet ne p ne a p.
 大きくなる と は 沼 のような 大きい 川 COP もの COP *A* だが
 pet sat hine nay neno kane an rapok ne hike
 川 乾くて 沢 のような ～のとき COP だが
 petkasu=an hine okusne wa yan=an ruwe ne.
 川を渡る=4.S て 向こう側 から 上がる=4.S こと COP
 石狩川は水が少ない時は沢ぐらいで、
水が多くなると沼のような大きな川になるのですが、
 その時は川が水がなくなって沢のようになっている時でしたが、
 私は川を歩いて渡って、向こう岸へ上がったのでした。

(ア音 5 : 77)

こうした対比関係は、過去の事態の場合に顕著にあらわれる¹¹が、過去の事態の場合は、aのアスペクト的性質(=perfective)からくるものともいえる。しかし、それ以外の恒常的な性質について述べる場合にも対比性があらわれていることを考えると、アスペクトという観点からは一義的に説明できない。

ここで本稿では、aが直接証拠性(direct evidentiality)¹²を示す形式であるとして説明を試みる。直接証拠のマーカは、話者の確信、内的状態、知識、信念などに関わる場合がある(Aikhenvald 2004 : pp.160-162,190-191, 373-376)。金田一(1993 [1931])はaが『「ちゃんと...した」意 (p.293)」をあらわすこと、知里(1974 [1936])は「文の内容を既定の事実として確説するもの (p.157)」とみている。このようなaのモーダルな側面は今まであまり問題にされてこなかったが、本稿ではこの点に着目した。

aには基本的に、当該の事態の確信性を強めることで、後続文との対比を際立たせる作用があると考えられる。そしてまた同時に、話者の内的状態(例7)や知識(例8)を対比の対象として挙げるためにaが用いられていると捉えることができる。

なお、(7)については、同じ物語の中に似た構造の文章(9)があるが、直後の文の「狩りに出かけた」というのは日常的な状況を述べているに過ぎないため、対比性がなく、aが現れていないのだと考えられる。

(9) Yupet emko un aynu a=ne hine

湧別川 中程 の 人間 4.A=COP て

iramante kus ekimne=an akusu sitturaynu=an.

狩猟する ために 山へ行く=4.S すると 道に迷う=4.S

私は湧別川の中流の者で、

狩をしに山へ行きましたところ、道に迷ってしまいました。

(ア音 6 : 38)

以下の(10)(11)も同様に、対比関係がある。(10)は「自身の弟は立派な人物であるから、これくらいの(価値の)品物を出してきても、話に応じるわけがない」という意味で発している言葉である。弟の人間性と、品物の価値との対比が見てとれる。また、自分の弟が立派な人物であるという話者の信念があらわれているとみられる。(11)は下線部全体がある種の挿入文のようにになっているが、「村の中央には村長が住み、年下のほうは上手に住んでいる」という話者の知識が、発話時の眼前の風景と対比されている。

¹¹ 本稿用例(2)(3)参照。田村(1960)の「比較」は過去と現在との比較を意味しているが、本稿における「対比」はその限りではなく、時間関係がない場合でもaは対比関係をあらわすという認識である。

¹² 証拠性(evidentiality)は、話し手がどのようにして文の表す情報を得たかを表す文法範疇である(斎藤ほか編 2015 : 118)。Haan (2005)によれば、証拠性は直接証拠(direct evidentials)と間接証拠(indirect evidentials)の二つに大別される。前者は、話者が述べている動作や出来事について知覚的な証拠がある場合に用いられる。後者は、話者自身は出来事を目撃していないが、出来事が生じた後でそれについて知った場合に用いられる。さらにこの間接証拠は、他者からの言語情報に基づく伝聞証拠(quotatives, reportatives, hearsay などと呼ばれる)と、非言語的情報に基づく推量証拠(inferential evidentials)に分かれている。また、間接証拠性との関連が指摘されているものとして、意外性(mirativity)がある。意外性とは、話し手の予想外の気持ちや新情報を表す意味範疇である(Delancy 2001, Aikhenvald 2004)。

- (10) nispa rak pe aynu rak pe a=akihi ne a p
 長者らしい もの 人間 (男) らしいもの 4.A=弟 COP A だが
 ene pak an pe ani a=hopunire yakka
 これほど ある.SG もの で 4.A=～を起こす ても
 hopuni kuni p ka somo ne kusu
 起きる ように もの も NEG COP ので
 na akkari an pe a=aniyar yak pirka
 もっと より ある.SG もの 4.A=～を人に持たせる と 良い
弟は長者であり、男であるものを、(lit. 長者であるもの、男であるものが私の弟なのだが)
 これくらいのもので起こしても起きるはずがないから、これ以上のものを持たせて寄越せ
 (ア音 6 : 50)

- (11) tomari or ta cip a=yanke hine kotan or ta arpa=an akusu
 舟着場 ところ に 舟 4.A=～をあげる て 村 ところ に 行く.SG=4.S すると
kotan noski kiyanne kur kotankorkur ne
 村 中央 年上の 人 村長 COP
poniwne kur kotanpa ta an pe ne a p
 年下の 人 村の上手 に いる.SG もの COP A だが
 eun patek supuya at hine
 そこへ だけ 煙 のぼる て
 舟着き場に舟を上げて村に行ったところ
村の中央 (に住む) 年上の方が村長で、年下のほうは村の上手に居るのだが
 その (二軒の家の) 方にだけ煙が上がって
 (ミ 1 : 153-154)

発話時点において何らかの証拠を持つということは、テンス的には過去になりやすく、そのため a が証拠性をあらわすことと、過去の事態をあらわす性質があることは自然に結びつく。これまではテンス的、アスペクト的な機能が指摘されてきたが、証拠性の機能を考えることで、包括的な説明が可能になる。金田一(1993[1931])や知里(1974[1936])が指摘していたモーダルな側面は、話者の確信と関連するものであり、これは過去の出来事について述べる場合でもあらわれている。服部編(1964)『アイヌ語方言辞典』の「確かに」という項目(p.302)では、「たしかに見かけました (I'm sure I saw it.)」に対応するアイヌ語文としていくつかの方言の例がある中で、(12)沙流方言、(13)帯広方言において a が使用されている。

- (12) sonno ku=nukar a p un. (沙流)
 本当に 1SG.A=～を見る A もの FIN

(服部編 1964 : 302)

- (13) *nekon an akkay ku=nukar a wa.* (帯広)
 どう ある.SG しても 1SG.A=～を見る A FIN

(服部編 1964 : 302)

但し、同項目の他方言の用例には *a* は無く、(12)も *sonno*「本当に」という副詞が用いられていることから、必ずしも *a* だけが確信性を担っているとはいえない。また、*a* が付加された場合と無標の場合とで完全な対立があるとも言えず、義務的な形式であるとはいえないのだが、*a* の機能を考えるうえでは重要な手掛かりになると考える。

4.2 *aan* との関係

a を証拠性標示の形式として考えた背景には、助動詞 *aan* の存在がある。*a* のほかにもうひとつ、過去ないしは完了をあらわす形式としてみなされてきたのが助動詞 *aan* である。*aan* について、金田一(1993 [1931])、知里(1974 [1936])、田村(1988a, 1996)、中川(1995)においては、「何か物事が起こったあと、その物事が実際はこういうことであった」というように、*aan* が既に起こった事態に対して、その事態の生起時には分からなかったことが、発話時現在において判明したことを表す形式であることが述べられている。また、知里(1974 [1936])、萱野(1996)は、*aan* が意外な事実または結果に対する驚きを示すことを指摘しており、ブガエワ(2014)は *aan* の機能を「感嘆ムード」としている。こうした先行研究の記述と実際の用例から、本稿筆者は吉川(2018)において、*aan* が間接証拠性および意外性をあらわしうることを指摘していた。

ここから、*a* と *aan* は証拠性において対立するのではないかと考えた。Haan(2005)によれば、過去をあらわす要素が直接証拠性と間接証拠性で対立する現象は、多くの言語にみられる¹³。たとえば以下のトルコ語の例では、過去辞 *-di* が話者によって目撃されたことを示すのに対し、過去辞 *-miş* は目撃されていないことを示す。

- a. *Ahmet gel-di.*
 Ahmet come-PST.DIR.EVD
 ‘Ahmet came.’ (witnessed by the speaker)
- b. *Ahmet gel-miş.*
 Ahmet come-PST.INDIR.EVD
 ‘Ahmet came.’ (unwitnessed by the speaker)

(Haan 2005, WALS Online, chapter77)

また、ディリック(2018)は、トルコ語の過去辞 *-di* は話者が「実際に動作を行ったか、あるいは行われたのを目撃し、確信を持って言う場合 (p.14)」に用いられ、過去辞 *-miş* は話者が「直接目撃した出来事ではなく、他人から聞いたり、後から気づいたり、何らかの形で間

¹³ ジョージア語などの南コーカサス諸語、チュルク諸語、コミ・ジリエーン語、ハイダ語、イカ語など。WALS ONLINE chapter77 参照。(https://wals.info/chapter/77)

接的に知った出来事や行為を表す (p.14)」と記している。

細江逸記(1973)¹⁴はこれらのトルコ語の過去辞の対立と同じ関係を、古代日本語の過去助動詞キ・ケリに見出し、キを「目睹回想」、ケリを「伝承回想」と位置付けた。細江(1932)は、「き」は『目睹回想』で自分が親しく経験した事柄を語るもの、「けり」は『伝承回想』で他よりの伝聞を告げるに用いられたものである。(pp.119-120)」としている。加藤(1998)は細江説を基本的には継承し、キ・ケリの基本的な意味・機能の差異について、以下のように記している。

原則として、発話時の表現主体にとって、過去に生起したと意識される事象を表現する場合、キ……その事象が生起するのをその時点で自分自身が直接目撃したり明確に意識したりしたという視覚的・感覚的記憶を伴うものを表現するのに用いる。
ケリ…こうした記憶を伴わないものを表現するのに用いる。それは、後になってからその後の状況によって気づいたり、また推定したり、また他人からの伝聞によって知ったりなど、何らかの方法で間接的に認識した事象である。

(加藤 1998 : 207-208)

本稿が主張する a と aan の対立もおおよそこうした対立である。「ケリ」が「キ (過去の助動詞) + アリ (存在動詞)」という構造であるならば、アイヌ語の aan (=助動詞 a + 存在動詞 an) という構造と同一であり、意味的形態的な並行性も注目すべき点である。¹⁵

以下、aan の例をいくつか挙げる。間接証拠は、Haan (2005)などによれば伝聞と推量に大別されるが、(14)は伝聞の例、(15)は推量の例である。(14)では、話し手が自分の身の上を語っている。主人公はもともと村長の息子であったが、幼い時に村に伝染病が流行って主人公以外全滅してしまった。それを天から降りてきた飢饉の神が育てていたのだが、主人公は大きくなってから初めてそのことを聞かされ、別の村を訪れたときにその経緯を話している場面である。村長の息子であったことと、神に育てられたことが、言語情報を通して間接的に確認されている。

(14) tapne Iskar penikehe rera oyan wa
 このように 石狩川 川上 伝染病が流行る て
 oro ta kotan kor kur poho a=ne aan korka
 そこ に 村長 息子 4.A=COP **AAN** けれど
 i=resu kamuy isam wakusu kanto or wa kemram kamuy ran wa
 4.O=～を育てる 神 いない ので 天 ところ から 飢饉の神 降りる て

¹⁴ 細江逸記(1932)『動詞時制の研究』泰文堂の改訂新版。

¹⁵ 但し、a・aan がキ・ケリの使用頻度と同等ではないことや、日本語古典の語りと一人称独話体であるアイヌ語の口承文芸の差異などは、今後検討すべき点である。また、キ・ケリの意味範疇については諸説あるため (井島 2011 : 349-410 参照)、さらなる検討が必要である。

i=resu hi ne aan pe ...

4.O=～を育てる こと COP *AAN* もの

かくかくしかじかで、石狩川の上流に伝染病がはやって

私は、そこの、村長の息子だったのですけれど、

私を育てる神様がいなかったで、天から飢饉の神様が降りて来られて、

私を育ててくださったのでしたが…

(ア音 2 : 52)

(15)は、話し手（＝物語の主人公）が自分の家に戻ってきたときに、家の中が荒らされている形跡を目にし、それが熊の仕業であることを推測した場面である。この場面で、既に熊はいなくなっている。

(15) a=uni ta ek=an ruwe ne akusu a=uni ta kamuy san aan hine

4.A=家 に 来る.SG=4.S こと COP すると 4.A=家 に 熊 下りる *AAN* て

私の家に来たところ、私の家にクマが下りて来ていたのでした。

(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ : C0215UT_35237AP)

また、間接証拠性と関連するカテゴリーとして意外性(mirativity)があるが、aan も意外性との関連が考えられる。例(16)(17)は、話し手が今まで知らなかったこと（新情報）を知ったことや、話し手にとっての予想外の出来事の生起が表されている。(16)は、相手（話し手の兄）が、幼い頃から千里眼¹⁶の持ち主であったことを明かし、話し手がそれを初めて知った場面である。(17)は、ふと気づくとこのような場所にいたという意図で発話されたもので、動作は無意識によるものである。

(16) easir a=yupihi isoytak kus

初めて 4.A=兄 話す ので

oyaciki ponram oro wano ueinkar kur ne aan.

なるほど 幼いとき から 千里眼の持ち主 COP *AAN*

初めて兄が話してくれたのでわかったのですが

実は、兄は小さいときから目に見えないことでも見ているようにわかる能力の

持ち主だったのでした。

(lit. 「初めて兄が話したので、兄は幼い頃から千里眼の持ち主であった。」)

(ア音 6 : 54)

(17) inkar=an akusu tan sunku nitek epokikomomse

見る=4.S すると この エゾマツ 枝 折れ下がる

cise neno kane an uske ta an=an hi ne aan wa ...

家 のように なっている 所 に いる.SG=4.S こと COP *AAN* て

¹⁶ 巫力によって、遠くで起こっているできごとが見えたり、これから起こることがわかったり、病気の原因を見つけたりすることができる。(中川 1995 : 52)

見ると、このエゾマツの枝が折れ下がり、家のようにになっている所に私はいたのです。
(アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ：C0150KM_34626ABP)

紙面の都合上、このほかの **aan** の例は吉川(2018)を参照されたい。

なお、**a** は終助詞や接続助詞など他の要素を後部に伴って文末相当の位置にあらわれる場合と、連体修飾成分となる場合があるが、後者の場合は証拠性というよりはテンス的、アスペクトの意味が優先されるものと考えられる（例 18）。また、**aan** にも同様の例がある（例 19）。

- (18) **a=unihi ne a p anak a=carpacarpa**
4.A=家 COP **A** もの は 4.A=～を散らかす
私の家だったものは、ばらばらに散らかされ

(ア音 5 : 79)

- (19) **te ta an aan kur ku=hunara kor k=omanan.**
ここに いる.SG **AAN** 人 1SG.A=～を探す て 1SG.S=歩き回る
ここにいた人を私は探して歩いていた
(一生けんめい探しまわっていたが、なあんだ、ここにいたんだな)

(田村 1988a : 42)

5. まとめ

以上、助動詞 **a** の機能について、証拠性とかかわりから考察した。助動詞 **aan** の機能とあわせてみると以下の表ようになる。**a** はこれまで過去・完了(perfect)をあらわすと考えられてきたが、本稿ではまずそのアスペクト性が **perfective** であることを主張した。そのうえで、**a** と **aan** が直接証拠／間接証拠という対立をなす可能性を示した。**a** と **aan** はテンス的・アスペクト的な性質に加え、証拠性標示の性質をもつ複合的な形式であると考えられる。但し、現段階では **a** がある場合と無標の動詞の場合とで完全な対立をなすものではなく、オプションな形式であると言わざるを得ない。今後、アイヌ語の他方言での事例も含めて記述を進めていきたい。

表 **a** と **aan** の意味

	アスペクトの意味	テンスの意味	証拠性	拡張の意味
a	perfective	過去（基本）	直接証拠性	確信、過去場面の思い出し
aan	perfect		間接証拠性	過去場面の推測、詠嘆

略号

1, 2, 4 : 人称 (三人称はゼロ表示。四人称は、包括的一人称複数、二人称敬称、不定人称、物語中の叙述者の人称等の用法を持つ), = : 人称接辞境界, S : 自動詞主語, A : 他動詞主語, O : 目的語, SG : 単数, PL : 複数, COP : コピュラ動詞, NEG : 否定, FIN : 終助詞

参考文献・資料・ウェブサイト (資料記号を付したものは、文献名末尾【】内に記した)

アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ「上田トシさんの民話(ア)「まぼろしを見た女」(1997)」

(http://ainugo.ainu-museum.or.jp/C0215UT_35237AP 2020-02-14 閲覧)

アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ「川上まつ子さんの民話(ア)「エゾマツの女神と魔鳥」

(1985)」(http://ainugo.ainu-museum.or.jp/C0150KM_34626ABP 2020-02-14 閲覧)

アイヌ無形文化伝承保存会編 (1983)『アイヌの民話』1, アイヌ無形文化伝承保存会.【ミ1】

井島正博 (2011)『中古語過去・完了表現の研究』ひつじ書房.

加藤浩司 (1998)『キ・ケリの研究』和泉書院.

萱野茂 (1996)『萱野茂のアイヌ語辞典』三省堂.

金田一京助 (1993[1931])「アイヌ語学講義」『金田一京助全集 アイヌ語 I』5, pp.133-366, 三省堂.

工藤真由美 (2014)『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房.

小林隆 (2000)「5. 文末形式「ケ」」『宮城県仙台市方言の研究』東北大学大学院文学研究科国語学研究室.

コムリー, バーナード (1988)『アスペクト』山田小枝訳, むぎ書房 [Comrie, B. 1976. *Aspect*. Cambridge University Press.]

斎藤純男・田口善久・西村義樹編 (2015)『明解言語学辞典』三省堂.

佐藤知己 (2006)「アイヌ語千歳方言のアスペクト—kor an, wa an を中心に」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』12, pp.43-67, 北海道立アイヌ民族文化研究センター.

——— (2007)「再びアイヌ語千歳方言のアスペクトについて—特に完了を表す形式をめぐって—」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』13, pp.1-14, 北海道立アイヌ民族文化研究センター.

——— (2008)『アイヌ語文法の基礎』大学書林.

高田祥司 (2008)「日本語東北方言と韓国語の<過去>の表現について」『日本語の研究』4 巻4 号, pp.32-47.

田村(福田)すず子 (1960)「アイヌ語沙流方言の助動詞—アイヌ語の助詞についての報告その1—」『季刊民族学研究』24(4), pp.343-354

田村すず子 (1985)『アイヌ語音声資料』2, 早稲田大学語学教育研究所.【ア音2】

——— (1988a)「アイヌ語」亀井孝, 河野六郎, 千野栄一編『言語学大辞典』1, 三省堂.

——— (1988b)『アイヌ語音声資料』5, 早稲田大学語学教育研究所.【ア音5】

——— (1989)『アイヌ語音声資料』6, 早稲田大学語学教育研究所.【ア音6】

——— (1996)『アイヌ語沙流方言辞典』草風館.

知里真志保 (1973[1942])「アイヌ語法研究」『知里真志保著作集』3, pp.457-586, 平凡社.

——— (1974[1936])「アイヌ語法概説」『知里真志保著作集』4, pp.3-197, 平凡社.

- ディリック, セバル (2018)「トルコ語チャナッカレ方言の述語形式」岡山大学大学院社会文化科学研究科博士論文.
- 中川裕 (1995)『アイヌ語千歳方言辞典』草風館.
- 服部四郎編 (1964)『アイヌ語方言辞典』岩波書店.
- ブガエワ, アンナ (2014)「北海道南部のアイヌ語」(児島康宏、長崎郁訳), 早稲田大学高等研究所編『早稲田大学高等研究所紀要』6, pp.33-76.
- 細江逸記 (1973)『動詞時制の研究〔新版〕』篠崎書林.
- 溝越彰 (2016)『時間と言語を考える―「時制」とはなにか―』開拓社.
- 吉川佳見 (2015)「アイヌ語沙流方言の散文説話中にみる助動詞 *a* の機能」千葉大学人文社会科学研究科修士論文 (未公刊) .
- (2018)「アイヌ語の助動詞 *aan* と証拠性」『アイヌ語の文献学的研究 (3)』pp.3-18, 千葉大学大学院人文公共学府.
- (2019)「アイヌ語の助動詞 *a* と証拠性」(日本北方言語学会第2回大会予稿、未公刊) .
- Aikhenvald, Alexandra Y. (2004) *Evidentiality*. Oxford University Press.
- DeLancey, S. (2001) The mirative and evidentiality. *Journal of Pragmatics* 33(3): 369-382.
- Haan, Ferdinand de. (2005) Semantic distinctions of Evidentiality. In *The World Atlas of Language Structure Online*, ed. Matthew S. Dryer and Martin Haspelmath, chapter 77. Max Planck Digital Library. Available online at <http://wals.info/chapter/77> Accessed on 2020-02-14.

The “Perfect” Aspect and the Evidentiality in Ainu

Yoshimi YOSHIKAWA

(NINJAL/ Graduate School of Humanities and Social Sciences, Chiba University)

In the Ainu language, which has no grammatical tense, and where the use of aspect form is not obligatory, the auxiliary verb *a* has been described as a marker of past tense or perfect aspect (Kindaichi (1993[1931]), Chiri (1974[1936], 1973[1942]), Tamura (1960, 1988a), Sato (2006, 2007, 2008)). On this issue, Yoshikawa (2015) previously pointed out that the auxiliary verb *a* is also used in cases where it does not represent the past tense nor the perfect aspect, suggesting that it may refer to the nature of a particular person, or to the speaker's knowledge. However, it remained to be seen what the precise function of the auxiliary verb *a* was that led to such expressions.

In this article, I first make a claim that the aspectual function of the auxiliary verb *a* is perfective, not perfect. Then I proceed to the second claim that the auxiliary verb *a* can indicate direct evidentiality, and that the exceptional usage mentioned above of the auxiliary verb *a* could be explained by its evidential function.

I further argue that, with reference to Yoshikawa (2018), it is not the auxiliary verb *a* but the auxiliary verb *aan* that represents the perfect aspect, and also that the auxiliary verb *aan* can indicate indirect evidentiality. It is in this respect that I attempt to redefine the functions of those auxiliary verbs *a* and *aan*. The auxiliary verb *a* may appear in the end of a sentence with other elements such as a final particle or a connective particle, or it may be a component modification component. In the latter case, I suggest that the aspectual meaning has priority over the evidential meaning.

(よしかわ・よしみ yoipois@yahoo.co.jp)